教育 みかわ

第147号

副会長挨拶
三教研に望むこと
（安城・幸田・岡崎支部）
学校自慢（蒲郡支部）
支部トピックス（高浜支部）
教室の窓から（田原支部）
私の研究（刈谷支部）
研究大会の報告
調査委員会報告
授業力養成講座
教育随想

三河教育研究会　令和8年3月10日

仲間と同じ空間を共有することで得られるもの

三河教育研究会　副会長
鈴木則明

私の勤務する新城市立東郷中学校は、「自分たちが創る授業で　仲間と共に問題を解決する生徒の育成」の研究主題のもと、去る十月三十日に研究発表会を行いました。研究主題に迫る手だての一つとして実践したのが、関わり合いの力を養う「ＭＣＣ（Morning Communication Challenge）」です。ＭＣＣとは、朝の十分間の関わり合い活動のことです。このＭＣＣで様々なテーマについて仲間と議論を重ねていくことで、生徒が協働的な学びを進めるための力を養うことを目指してきました。

三年生のある学級のＭＣＣのことです。「東郷中の自慢」をテーマにした議論がなされました。生徒の自主性や生活態度、学校環境から自然環境、歴史に至るまで数多くの本校の自慢が、根拠に基づいて意見として次々に出されました。そして、その中で、発言のタイミングを見計らう姿、相手の表情や声のトーンから感情を読み取る姿が見られました。まさに、生徒が教室という同一空間を共有する中で、クラス全員の空気を感じながら議論を展開している場面に遭遇した感覚になりました。

また、十月、十一月には、「授業力養成講座（秋期講座）」が行われ、私は、西尾市での保健体育、豊橋市での数学の授業並びに研究協議会に参加しました。三河各地区から授業力の向上を図ろうという意欲に溢れる中堅の先生方が集い、研究授業を通して、子どもの学びのとらえ方や発問の機会、手だて、指導・評価の在り方に至るまで具体的な場面をもとに、議論が交わされました。そして、ここでも本校のＭＣＣ同様、自分の意見に関連する場面を見極めて発言する姿、相手の思いを言葉以外からも感じ取る姿が見られることに加え、場の雰囲気に合わせて自分の意見を調整しようとする姿がありました。

働き方改革が叫ばれる昨今、オンライン会議等が推奨され、私たちは、その効率性や有用性に関して十分に認識しているつもりです。しかし、議論を交わす相手と同じ空間を共有することで伝わるニュアンスがあります。表情や身振り手振りから相手の感情や意図、熱量を受け取り、チームの一体感や士気の高揚を間近で感じ取ることができます。

今回、研究発表会と授業力養成講座という二つの機会を通じて味わった仲間と同じ空間を共有することで得られたものは、子どもたちにとっても私たちにとっても必要不可欠なものであり、大切にしていかなければならないものであると改めて思いました。

「生きる力」を問い続ける

三河教育研究会　副会長
平井千夏

私が教壇に初めて立った平成の初め頃は、スマートフォンもインターネットも普及していませんでした。職員室の机上には先生たちが自前で準備したワープロが置かれ、感熱紙で自作プリントを印刷した、そんな時代でした。

あれから世の中は大きく変わり、学習指導要領も何度か改訂されました。選択教科、学校裁量時間、生活科、総合的な学習の時間、外国語活動、道徳の教科化等、様々な内容が導入され、一方で消えていったものもありました。学校五日制や絶対評価への変更も平成の大きな変革でした。

そして今、次期学習指導要領の改訂に向けた検討が進んでいます。昨年九月に公表された論点整理では、現行学習指導要領の成果と課題を踏まえて次期学習指導要領の方向性が示され、「情報活用能力・多様性への対応・余白の創出」等、諸課題に対する方策が並んでいます。

今年度の全国学力・学習状況調査報告について意外に思ったことがあります。「日本の子どもたちは自己肯定感が低い」とよく言われますが、中学三年生の回答では「自分には良いところがある」「先生は良いところを褒めてくれる」について「どちらかと言えばそうだ」を含めると九割近くの生徒（全国・愛知県）が肯定的に回答しているのです。中でも「先生が自分の良いところを褒めてくれる」は九割を超え、現場の先生方の努力が感じられます。コロナ前（令和元年度）コロナ禍（令和三年度）と比較しても、これらの質問に対する肯定的回答の割合は上昇しています。

一方で、子どもたちの家庭学習の時間は減っています。受験生である中三の生徒でさえ、四割近くが「平日の家庭学習は一時間未満」と回答しています。将来に向けて地道に努力を重ね、自分を鍛える経験を十分に積まないまま大人になる子どもが相当数いるのではと危惧しています。

「生きる力」という言葉が学習指導要領に登場したのは一九九八年（平成十年）の改訂の時です。あれから長い時間を経てもなお「生きる力」は学校教育の柱です。次期学習指導要領にこの言葉が残るか不明ですが、今回の論点整理に記されている「自らの人生を舵取りする」という表現は、まさしく「生きる力」そのものではないでしょうか。時代が変わり、指導要領の表現が変わっても、教育の目標は、やはり「生きる力」の育成であることに変わりはないと改めて感じます。

三教研に望むこと

経験の浅い教師の授業力向上に向けて

安城市立新田小学校
岡　戸　俊　之

長放課になると校長室の扉がコンコンとノックされることがあります。ドアを開けるとタブレットを片手に数名の子どもが立っています。子どもたちは、「校長先生、今、お時間よろしいでしょうか。わたしたちは、総合的な学習の時間に、〇〇について調べています。〇〇について、もっと地域の方に知ってほしいと思い、ちらしとポスターを作りました。それのご指導をお願いします。」と来室して説明してくれます。

そのとき、私は内容の指導の前に、これを具体的にどんな人に伝えたいかを尋ねることにしています。相手意識を大切にしてほしいと思っているからです。また、内容は目的に合っているか、伝えたい相手に適しているかを尋ねます。子どもたちは、悩みながら説明します。子どもたちが、うまく思いを伝えられないときは、「教室へ戻ってもう一度考えてね。」と促します。このようなやり取りを通して、子どもたちの目的意識が明確になるように支援します。

私は子どもたちが、何度もやり直しをすることについて、もう嫌だと思うのではと考えていました。しかし、「総合学習はおもしろいです。分からないことをどんどん知ることができます。ちらしを先生に直してもらえると、よりよいものを教えてもらえている気持ちになりうれしくなります。」と、答える子どももいます。

子どもがこう言えるには、教師による適切な支援によって追究を深めているからと言えるでしょう。経験の浅い教師が、教材研究などによって子どもの追究を支えているのは事実です。しかし、経験のある教師との差が出てくるのも事実です。

これからの三河教育を支えていくのは、悩みながら子どもたちの追究を支えようとする経験の浅い教師です。子どもたちの追究をよりよいものにするには、教師がより多くの引き出しをもち、適切な方法で支援することが大切です。教師としても授業力を向上していくことは最も大切なことの一つです。それには、よりよい授業を多く参観したり、協議したりすることが必要です。今までも、そういった機会をつくってくださっていることに感謝します。今後、経験の浅い教師に視点を当てた授業力向上の機会を、三教研がリードしてつくっていただけることに期待します。

子どもを中心に据えた教育を

幸田町立坂崎小学校
黒　田　信　弘

わたしが教員生活を始めた年に、昭和が平成となり、平成をあっという間に駆け抜け、令和に入ったと思いきやすでに八年目。改めて時の流れの早さに驚かされます。そして、この間の学校教育を取り巻く課題も当然のように大きく変容しました。

平成初期に、詰め込み教育を是正する形で「ゆとり教育」が誕生し、学習時間や内容を減らす中で、思考力を鍛える経験重視の活動が展開されました。しかし、学力低下の指摘から「脱ゆとり」へと転換。その後、ＩＣＴ環境の整備が進み、令和に入ると「ＧＩＧＡスクール構想」により、一人一台端末が普及。現在につながる大きな転換がなされました。新型コロナウイルスの影響で、学校の役割や学びの保障が問い直されたことも強く記憶に残っています。

来る新学習指導要領では、「ＡＩ時代に対応した資質・能力の育成」「多様な学びへの支援」などが注目されているようです。

このように、先の見えにくい時代の中で、目の前の子どもたちにどう向き合い、様々な力を伸ばすべく指導していくか、わたしたち教員の責務は軽くありません。常に子どもを最優先でとらえ、未来社会を見据えた教育の探究を継続している三河教育研究会の理念を大切にしながら、これからも研鑽を重ねたいと思います。

創造的な学びを共につくるために

岡崎市立城南小学校
菅　美津枝

三年前、本校が市の研究委嘱を受けた際、私たちは「創造とは何か」という根源的な問いに直面しました。模索し続ける中で私が行き着いたのは、自身の原体験です。仲間と知恵を寄せ合い、試行錯誤を経て新たな価値を見出す、この葛藤と発見のプロセスこそが、学びの本質であり「創造」なのだと確信しました。本校ではこの視点に基づき、「学び方の選択」と「考えの再構築」を柱に据えた実践を展開してきました。学習課題に対し、解決への道を複数提示して子ども自身に選択させる。そして、チーム隊形での対話を軸に、他者の視点を取り入れながら自らの考えをより高次なものへと作り変えていく。こうした「自立」と「共創」が循環する授業の中で、子どもたちが互いの存在を認め合い、粘り強く思考を深める姿に、手応えを得ることができました。しかし、教育を取り巻く課題は常に変化し続けます。一人一人の実態に即した学びを保障し続けるためには、私たち教師自身もまた、「創造的」であり続けなければなりません。三河教育研究会のように教師同士が実践を語り合い、新たな教育の形を共に描き出し続けてほしいと願っています。子どもたちの未来のために、これからも研鑽し続けたいと考えています。

学校自慢

石焼き芋でつながる

蒲郡市立大塚小学校

本校では令和四年度から「地域学校協働活動」が始まり、地域の方と学校が一緒になって子どもたちを育てる取組が進んでいます。授業のサポートや校外学習の支援などが定着し、昨年は延べ四百人の方々に参加いただきました。

毎年、地域資源保全会、区議員、地域の方が子どもたちのためにサツマイモを育ててくださり、一・二年生が農園で芋掘りを行います。「大っきい。」「いっぱいあるよ。」土の中から現れたサツマイモを手にして、あちらこちらから歓声が上がります。収穫したサツマイモは学校へ持ち帰り、六年生が一つひとつ丁寧に洗って石焼き芋集会に備えます。

昨年度までは、授業参観の後、親子で石焼き芋を味わいましたが、今年度からは一小一中のよさを生かし、中学校と合同で石焼き芋集会を行いました。校庭の一角で地域の有志の皆さんが、収穫した約五百個のサツマイモを「石焼き芋」にしてくださいます。石の上でじっくりと焼く芋はとても甘くなり大好評です。朝早くから六つのドラム缶を設置し、中に石を敷き、薪に火をつける準備を始め、授業参観が終わる時間に間に合うよう、気を配りながら丁寧に焼き上げてくださいました。授業中から漂っていた焼き芋の香りに誘われ、子どもたちが運動場に集まり会がスタート。全児童・全生徒が地域の方へ感謝の言葉を伝え、地域の方からも温かい言葉をいただきました。異学年交流の班ごとに特製の石焼き芋を手に話が弾み、小中の子どもたちが笑顔で交流する姿が見られる貴重で和やかな時間となりました。これからも子どもたちと地域の方々との心温まるつながりが続いていくことを願っています。

（文責・大塚小・伊藤　和欣）

石焼き芋を手に大満足な子どもたち

支部トピックス

高浜支部

授業力向上のための取組

高浜市では、授業力を向上させるための取組が大きく二つあります。

一つは「授業公開」です。これは、市内の全ての学校の先生が一年に一回授業を公開します。公開日と公開時間の情報は市内の学校で共有され、同じ学校の先生はもちろん、他校の先生も授業を参観することができます。小学校の先生が中学校の先生の授業を参観したり、時には園の先生が小学校の授業を見に来たりすることもあります。公開する授業は教科や学級活動、総合的な学習の時間など様々ですが、授業者は学年の先生や同じ教科の先生と相談しながら指導案を作り、授業づくりの過程を大切にした取組となっています。

もう一つは、高浜市教育研究会が行っている一斉授業研究会です。高浜市教育研究会は二十の部会があります。各校の先生がいずれかの部会に所属し、各部会ごとの研究主題に基づいて活動をしています。今年度は十月十六日に一斉授業研究会を実施しました。一斉授業研究会の実施教科はローテーションで決まっており、今年度は算数・数学、外国語、総合的な学習の時間、道徳、国語、社会、理科の七部会で実施しました。今年度実施しない部会の先生は、実施する七部会のいずれかに参加します。講師には、大学教授や高浜市以外の先生をお招きしました。研究会当日は、どの部会においても、「主体的・対話的で深い学び」につながる提案授業がなされました。授業後に行った研究協議会では、授業記録をもとに学びを深める手立てや教師支援の在り方、個に応じた支援の在り方などについて活発な討論がなされました。また、講師の先生からは貴重なご指導もいただくことができ、私たちにとって学びの多い、価値ある活動となりました。

（文責・高浜中・三牧　秀和）

一斉授業研究会当日の様子

教室の窓から

楽しい学校―学び・仲間・ふるさとが楽しい―

～地域の「ひと・もの・こと」と関わり、「学び合う」活動を通して～

田原市立亀山小学校
湧川　朝仁

亀山小学校は、渥美半島の先端、三河湾側に位置し、学校はキャベツ畑などに囲まれたとてものどかな地域にあります。全校児童三十七名で、現在三・四年、五・六年の二学級が複式学級の小規模校ですが、学習や遊びなど様々な場面で縦割り班活動、異学年交流を行い、共に学び合いながら楽しく活動しています。また、地域の人たちの学校愛も強く、密接なつながりがある協力的な地域であり、温かい地域の人たちに包まれ、地域と連携・協働しながら様々な学習活動に取り組んでいます。

本校の運動会は、保護者や保育園児、中学生、消防団や自治会など、地域種目がいっぱいの校区運動会として開催しています。毎年、多くの地域の人たちに来ていただき、子どもたちに声援を送ったり、一緒に競技を盛り上げたりしていただいています。その中でも、参加者全員が一つの輪になる「亀山の輪」は、我が校の伝統であり、校区の一体感を確認できるものとなっています。

また、今年度から「市民館まつり」に児童たちが参加しました。全校児童による合唱の披露や学年ごとにブースを設けて学習の成果を発表したり、児童が育てた野菜の販売を行ったり、田原赤十字奉仕団とのコラボレーション企画・リラクゼーションスペースを設けたりすることで、地域の人たちと触れ合い、交流の輪をさらに広げることができました。

他にも、祖父母などを招き、交流を深める「三世代餅つき大会」、地域の人たちといっしょに整備した「うしのけ山」での「落ち葉スキー」、子どもたちが育てたカイコの繭から、スクールサポーターに教えていただきながら行う「糸取り」、社会見学や宿泊体験学習、修学旅行などで取り組む他校との学校間交流など、様々な立場の人たちと関わりながら「学び合う」活動は多種多様にあります。これからも人と人との関わりを大切にして、「楽しい学校」の実現のために「学び合う」活動を高めていきたいと考えています。

校区を１つにする運動会の伝統の「亀山の輪」

私の研究

自ら問題意識をもって追究し、社会的事象を多面的・多角的に考えられる子の育成

～小学四年社会科　教材・資料の提示と他者との関わり合いを通して～

刈谷市立住吉小学校
谷村　公基

一　はじめに

一学期の実践では、児童が社会的事象を一面的に捉えてしまい、事実の関連や背景にある人々の想いにまで迫る姿は十分に見られませんでした。そこで、児童が自ら問題意識をもち、社会的事象を多面的・多角的に考えられるようにすることを目指して本実践に取り組みました。

二　実践「どうして豊田喜一郎は自動車作りをしたのだろう」

第一時で、トヨタ自動車の起源が刈谷市にあることを知った児童に、トヨタと刈谷市のつながりを示した年表を提示しました。児童からは「どうして織機の会社が自動車部を作ったのだろう」という疑問が生まれ、自動車部を立ち上げた人物が豊田喜一郎であると伝えると、「どうして豊田喜一郎は自動車作りをしたのだろう」という問いへと発展しました。

第二時以降、児童はその問いの解決に向け、当時の生活の様子や喜一郎の生い立ちなど、さまざまな視点で一人調べを進めました。また、「歴史に詳しい人の話を聞きたい」という声を受け、第五時には刈谷市歴史博物館の方からお話を伺いました。第六時の話し合いでは、歴史的・経済的な側面から理由を考えました。さらに、自動車作りに反対した人の存在を示すと、「反対されてもなぜ挑戦したのだろう」という新たな問題意識が生まれました。

第九時にはトヨタ創業期試作工場の見学を行い、トヨタ産業技術記念館の方からもお話を伺いました。喜一郎や携わった人々の想いに触れたことで、児童は考えを深めました。第十時の話し合いでは、歴史・経済・社会的側面に加え、喜一郎本人、自動車作りに反対した人などの立場から、自動車産業の始まりを多面的・多角的に捉えることができました。

三　おわりに

豊田喜一郎を教材として扱い、資料の提示や他者との関わり合いを大切にしたことで、児童は主体的に追究し、多面的・多角的に考える力を高めることができました。今後も実践を重ね、よりよい授業づくりに努めていきたいと考えています。

トヨタ産業技術記念館の方から話を聞く様子

研究大会の報告

生徒指導

主体的な選択・決定を促す
自己指導力を育む生徒指導

令和七年度
愛知県生徒指導研究大会
期　日　十一月十一日（火）
場　所　豊田市民文化会館
参加者　四百五十名
研究発表
○互いに尊重しあい、よりよく生きようとする子どもの育成
○自ら問題を発見し、課題や目標を設定して、目標達成に向けて、行動できる生徒の育成
○交通安全教育の取組
指導講評
愛知県教育委員会　義務教育課
主席指導主事　田中　俊行　先生

本年度の愛知県生徒指導研究大会は、三河地区の担当で、豊田市の豊田市民文化会館にて盛大に開催されました。

研究発表では、三河・尾張・高校で、それぞれ一名の先生が発表されました。

三河ブロックからは、豊田市立浄水中学校の稲葉浩志先生が、学校生活における課題や解決方法を集約するためのアンケートの実施、生徒主導の活動の発案と実施、活動終了後に行う自分の取組についての振り返りを手立てに、問題や課題を発見し、目標を選択・設定して、目標達成のため、主体的に行動を決断し、実行することができる生徒の育成を図った実践が発表されました。

また、紙上発表として、蒲郡市立大塚中学校の冨樫優太先生、蒲郡市立西浦中学校の杉浦幹晃先生が、「生徒が主役の学校づくりの実践」、みよし市立三好中学校の中島裕也先生が「自ら考え、自らの生活を向上させることのできる生徒の育成」と題した実践を、大会に寄稿されました。

発表を受けての研究協議

◇◇◇

授業力養成講座

～中堅教員のミドルリーダーとしての資質向上をめざして～

授業力養成講座は、ミドルリーダーの育成のため、各校の中堅教員を対象に、授業の在り方や参観の仕方、協議会の進め方などを研修できる機会として、平成二十二年度より開催しています。

講座は、講師を招聘し講義形式で進める「授業力養成講座Ⅰ（夏期講座）」と、実際の授業を参観し、授業協議会をとおして授業の在り方を学ぶ「授業力養成講座Ⅱ（秋期講座）」を行いました。

授業力養成講座Ⅰ（夏期講座）

【東三河】
○期　日　八月十八日（月）
会　場　豊橋市教育会館
受講者　十九名
講　師
・理科
筑波大学附属小学校　教諭
鷲見　辰美　先生
「授業者として大切にしたいこと」
○期　日　八月二十一日（木）
会　場　男女共同参画センター（豊橋）
受講者　十名
講　師
・数学科
愛知教育大学　准教授
青山　和裕　先生
「GIGAスクール時代の学校や授業の価値の見直し、授業運営について」

【西三河】
○期　日　八月二十日（水）
会　場　にしん文化会館茶々っとホール
受講者　五十八名
講　師
・保健体育科
愛知教育大学　准教授
鈴木　一成　先生
「保健体育授業における学習指導力育成六観点」
・総合的な学習の時間
刈谷市立朝日中学校　教頭
伊倉　剛　先生
「子どもが生き生きと活動する授業の創造」

本年度も魅力溢れる講師の先生方をお招きし、夏期講習では、授業づくりに対する実践的な理論について学びました。講師の先生方の経験や実践に基づき、単元のつくり方、評価についての捉え方、主体性を引き出すキーワード、さらには人を育てることの意味などについて教えていただきました。二学期の授業に向けて、自分の授業を見直したり、学んだことを自校で伝えたりしていこうとする気持ちを高める受講者の姿や感想が多くありました。

授業づくりの意見交流をする

受講者の声

・子どもからどう問いを引き出すか、何を教材とするかがとても重要でとても難しいと感じました。教師側が子どもに何を学ばせたいかを明確にし、単元構想、教材研究をきちんとしなければならないと思いました。（総合）

・評価についての捉え方と、授業づくりのポイントが自分の中で整理されました。思考の流れを追いながら、学ぶべきことをどう教えるのか、ヒントをたくさんいただきました。（保健体育）

・「人を育てる」という意識をもっともっていきたい。普段から意識しているつもりでいたが、数学の授業では、問題が解けるようになってほしいという思いが先行しすぎていたと反省した。授業の進め方について、改めて見直したい。（数学）

・概念を覆すことができるような引き出しを増やしたいと思いました。子どもが主体的に学びたいと思えるような七つのキーワードが印象に残りました。これから授業づくりについて考えるときに一つでも要素を取り入れられるように意識したいと思いました。（理科）

授業力養成講座Ⅱ（秋期講座）

【東三河】
○期　日　十一月六日（木）
会　場　豊橋市立豊岡中学校
受講者　十名
講　師　青山　和裕　先生
授業者　鈴木　聡　先生
○期　日　十一月七日（金）
会　場　豊橋市立中野小学校
受講者　十九名
講　師　鷲見　辰美　先生
授業者　丸山　陽平　先生
三年　理科

【西三河】
○期　日　十月十五日（水）
会　場　西尾市立東部中学校
受講者　二十九名
講　師　鈴木　一成　先生
授業者　稲垣　満夫　先生
三年　保健体育科
○期　日　十一月五日（水）
会　場　碧南市立西端小学校
受講者　二十九名
講　師　伊倉　剛　先生
授業者　山中　祥雅　先生
六年　総合的な学習の時間

講座Ⅱでは、どの授業においても、子どもたちの問題意識を大切にした授業が展開され、主体的に学習が進められるように教師支援が講じられていました。そこには積極的に意見を伝え合う子どもたちの姿がありました。

講師の先生に事前に授業の視点をいただき、協議会がより充実したものとなりました。子どもの発言をもとに、教師支援の在り方について、熱心に意見を交わしました。講師の先生からは、座席表や教師の出などについてご指導をいただき、充実した協議会となりました。

授業での子どもの交流

受講者の声

・今回の講座で、国が求めている教育と、実際に育てていくべき教育に実はズレがあるのではないかと考えました。中堅なので、言われたことをただやるだけではなく、目の前の子どもたちの実態に合わせて必要な指導を行える技量を身につけていきたいです。（数学）

・主体的な学び、個別最適、協働学習といったテーマを、言葉としてだけでなく、具体的な内容で学んでいくことができた。日々の授業でも何を核にするのかを考えながら行いたい。鷲見先生のお話もわかりやすく、曖昧なところから理科の面白い問題・課題ができるということを大切にしていきたい。（理科）

・「目に見えるもの」だけでなく、「目に見えないものをどう作るか」という視点をもって教材研究を行うことや、子どもが将来大人になった時どのような力を身につけていてほしいのかを大切にしたいと思いました。（保健体育）

・子どもの考えの深め方やその際の留意点などの授業の方法を具体的に学べました。また、自分にはない視点での授業観察の視点を与えてくださり、より学びが明確になったと思います。受けていて大変楽しい研修でした。（総合）

教育随想（97）

子ども一人一人に寄り添う

幸田町教育委員会
教育長
池田　和博

「失礼します。」
礼儀正しく教育長室に入って来たのは通信制高校の三年生になった身長一八〇センチを超えた青年でした。
「今年も屋久島に宿泊研修に行ってきました。友達が増えました。」
少し日焼けした笑顔で、高校の宿泊研修が楽しかったことや福祉施設でアルバイトをしており、入居者にかわいがってもらっていること、高校では一生懸命勉強し、大学進学をめざしていることなどを話してくれました。
彼は、中学一年生の時に不登校となり、時々保健室へ顔を出していました。私は、彼が中学校二年生になった時に校長として赴任しました。初めは遠慮がちに話をする生徒でしたが、少しずつ話ができるようになり、先生方の代わりに数学や国語の勉強を一緒にすることが増えました。しばらくすると、体育館で一緒にバドミントンをしたり、校庭の木々の剪定や木製ベンチの製作などの木工をしたりするようになり、校長室で過ごして帰ることもありました。
彼の他にも、何人かの不登校生徒と話をしたり、一緒に勉強をしたりすることができるようになりました。ドローンを趣味とする生徒には学校を空撮して学校紹介ビデオをつくってもらいました。すばらしい映像でした。
ところが、次の年の四月から私は教育長室にいることになり、彼らの中学校での生活を見ることが難しくなりました。先に述べた生徒は通信制高校に進学することが決まり、卒業式は体育館ギャラリーから参加したそうです。
彼が高校へ進学して一年を終えようとしている時に、
「お忙しいところ申し訳ないですが、会っていただけませんか。」
と連絡がありました。私は迷うことなく了承しました。それから毎年、普段は教育長室に来ないような若者が訪ねて来てくれていますが、来る毎にたくましくなっていると感じています。
私は、教職に就いている間に多くの不登校児童生徒と接してきました。朝、迎えに行ったり、夜、家に行って話をしたり、一緒にゲームをしたり。時には何ともならないもどかしさを感じながら、児童生徒に向き合ってきました。そうした生徒の中には、今でも毎年年賀状を送ってくれる子もいれば、街で会った時に丁寧にあいさつしてくれる子もいます。うれしい限りです。
さて、十月末に文部科学省から令和六年度の不登校に関する調査結果が公表されました。それによると、全国の小中学校における不登校児童生徒数は三十五万人を超え過去最多。ただ、増加率については低下しているとのことです。コロナ禍以降増え続けてきた不登校児童生徒数がようやく収まってきた感があります。
今は教育長として、学校全体で不登校対策に取り組めるように校内教育支援センターの体制整備や町教育相談室機能の強化、そのための人的配置等を積極的に進めています。
幸田町では、令和六年度は前年に比べ小学生の不登校数は減少、中学生は微増でした。様々な施策を講じてはいますが、根本は先生方を始め関わっていただいている方々が子ども一人一人に真摯に向き合い、寄り添っていただいているからだと感謝しています。

編集後記

子どもたちの表情、先生方のていねいな支援、地域の方とのつながり、どの記事からも、人と人とが寄り添いながら育っていく風景が伝わってきます。変化の大きい時代だからこそ、こうした実践の一つ一つが、子どもたちにとって大切な土台になるのだと感じました。
ここに令和七年度の最終号をお届けいたします。この一年間、貴重な原稿をお寄せいただきました皆様には、心よりお礼申し上げます。また、「教育みかわ」をご愛読くださった皆様、本当にありがとうございました。
皆様にとって読みやすく、教職員のさらなる力量の向上につながる会報誌となるよう、一層の充実を心がけて取り組んでまいります。

表紙の写真
「道なき道を行くこれでもれっきとした『市道 牛川町-大村町二四四号線』～『牛川の渡し』～」
撮影　豊橋市立牛川小学校
山田　永子 先生